

特35  
747

東京  
書館  
藏



神異紀聞序

異哉神德之靈且妙也。至微而至幽。而其跡著明確實。往古來今。有不可誣者焉。然世之說神德者。或索于神代。搜于古史。乃世遠時隔。多不切於近人之心。

明治九年圖書局發行

○神異紀聞初編序

〇一

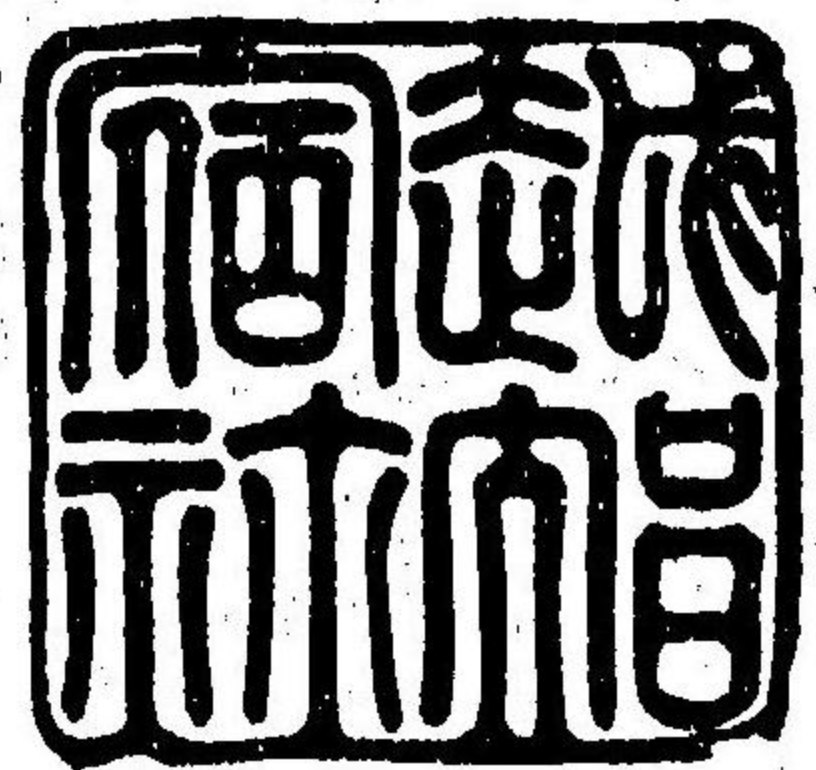
矣。予深惜嘆焉。近頃渡邊君蓋有慨于  
此。哀神德之著明確實而顯於近世者。  
名曰神異紀。聞其弟重石丸來囑予弁  
言。予受而讀之。其紀事之妙。能叙神明  
之異。妙靈之顯。乃使讀者猶身親到真  
境。目覩實事。於是乎足感幾人之心矣。

是雖一小冊子。有裨益于吾神教。不淺  
也。君吾先師平田翁高足弟子。博窮  
神典。徧通國史。其不求之於古。而求之  
於今。蓋取其尤切於人心者。爾予羨之。  
教正苟見其有益吾神教者。不堪欣賞  
之。至乃書一言於卷首云。

編序

紀元二千五百三十五年

大教正從四位稻葉正邦撰



世に神に望みしは疑ふ者の學問多し  
一。元人可も少記しつゝふらふ。大槪  
問。胸中より物を書れ。圓より良心を  
隠されて。物に容れ。身て事身のまね  
女子哉。ぬまをよ。即ち女體は授け  
神に。己より書。事に怪し。疑ふ。ま  
難。とあれ。神に。百無。怪し。疑ふ。ま  
何。と。頓。神に。授け。ま。疑ふ。ま。

あはれ哉。偶々其の良に遇ふべし。本多氏に成  
願を以て能くする。難くはるべし。其の  
や。衆人の如く。其の言として神は造化の神也。  
固まれば言ふは。蔽隠の言也。最稀の言  
故に。其の神あるは。其の言自れに辨し  
疑はれし。彼言は。其の言は。其の言は。其の言は。  
其の言の。其の言の。其の言の。其の言の。其の言の。  
其の言の。其の言の。其の言の。其の言の。其の言の。

神社大宮回権少教正海(海)の著  
これ神異紀園の書にして。其の書は。其の書は。其の書は。  
福中醫書にして。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。  
其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。  
其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。  
其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。  
其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。  
其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。  
其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。  
其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。其の書は。



丁七 陰惡イムアク神カミの所知シレ食シメしメ誅チウし給タマひし話ワザナヒ

丁十 社ヤシロノキ木キ松マツ伐キりし御ミ崇タリより一ヒトムラ村ラネト悉クワく火災サイあり

あひし話ワザナヒ

五十 忌服キブクある大工ダイク社ヤシロの營繕エイゼムより参マりてある松マツ哥カ

免給タマえで御ミ誨サシありし話ワザナヒ

七十 神社ジムシヤの境内ケイダイより禁キム松マツ犯オカしメ鉄炮テツポウ松マツ放ハナてる

者神モノカミ松マツ御怒ミイカリ松マツ蒙カケフりし身ミまがりし話ワザナヒ

九十 神カミ松マツ深く信シみ奉ホウりし難ナム船セン松マツ禍ワザナヒ松マツ免マカりし話ワザナヒ

一廿 社ヤシロノキ木キ松マツ伐キりし血チ松マツ流ナガき出デし話ワザナヒ

二廿 社ヤシロノキ地チの竹タケ松マツ伐キりし崇タリありし話ワザナヒ

三廿 産土ウツツチ神カミの御守ミマモリより流行ハヤリ病ヤミの止ヤまり

し話ワザナヒ

四廿 家ウチの鎮守チムシユ松マツ社ヤシロ松マツ蹶ケ毀コボちし者モノの即ツ罰バツ松マツ蒙カン

し話ワザナヒ

卷之下

一 社木松伐りたる御祟より難船あり

は松謝罪しり助ありし話

四 箱に造らむと社木松きりける不測

其木は釘の繁く立てりしを何の材も

用ひ難く徒に棄たりし神異の話

五 神家松盗みある者の御罰松蒙りし話

六 日向国母智五社の神異は種々ありし話

二十 現身ぬぐ神界に到りて帰るし話

四十 神松茂如よしける者に嚴罰松蒙りて病死

しけるの幽冥に赴きても甚じき神罰に逢

ひし娘の神松深く信み奉るより其

苦み松免せし話

廿 悪行松神の懺み給ひて其家松焼給ひし話

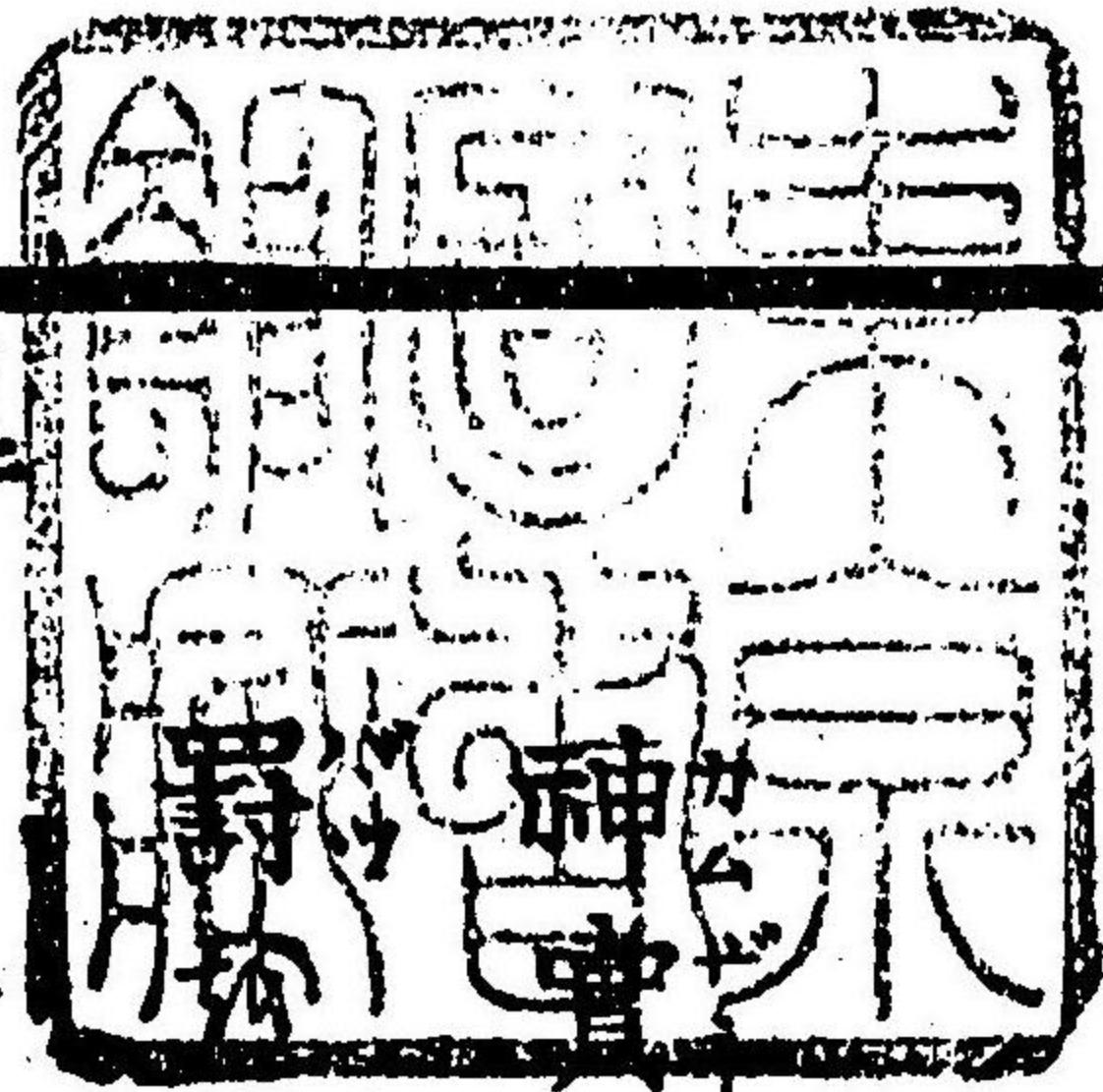
附<sup>ク</sup> 鉄炮より天狗<sup>テム</sup>をうち取り<sup>ト</sup>し話<sup>ハナシ</sup>

五<sup>ニ</sup> 神の御守よりて病の癒<sup>イユ</sup>し話

六<sup>ニ</sup> 神に御<sup>ミ</sup>諭<sup>サシ</sup>よりて火災<sup>クワサイ</sup>を遁<sup>ノ</sup>れし話

近世 神異紀聞初編目録終

近世 神異紀聞初編卷之上



龍田神社大宮司正七位渡邊重春誌

神<sup>カミ</sup>寶<sup>タカラ</sup>松<sup>マツ</sup>取出<sup>トリイデ</sup>て無礼<sup>ムレイ</sup>き事<sup>コト</sup>を爲<sup>ナ</sup>しける者<sup>モノ</sup>此<sup>コノ</sup>嚴<sup>ゲン</sup>蒙<sup>カク</sup>りし話<sup>ハナシ</sup>

往<sup>イ</sup>し明治五年三月の事<sup>コト</sup>をいける。甲斐<sup>カハ</sup>國<sup>クニ</sup>巨摩<sup>コモ</sup>郡<sup>クニ</sup>志田<sup>シダ</sup>村<sup>ムラ</sup>に清源寺<sup>セイげんじ</sup>てふ寺<sup>テラ</sup>の支配<sup>シツパ</sup>る觀音<sup>クワンオン</sup>の開<sup>カイ</sup>帳<sup>チヤウ</sup>ありけり。然<sup>シカ</sup>るもと岡引<sup>オカヒキ</sup>といふ<sup>イフ</sup>に使<sup>ツカ</sup>えし



三代吉と云ふ者ありて。素よとせよと神も佛も  
無き物と思ひけはる。此度の此観音の開帳とて。  
老も若支も袖打連て参詣るて空返をることと思  
ひ。其上観音此扉松開さて見ぬらむ者た。盲人と  
ぬるなど。昔よと云ひ傳ふれた。いのもしと。人  
の夢松覺してむと。或日群る人字押介と。此観  
音松岩穴より引出しと。其ととめれる河よ投入

初れど。何れ祟も無としるを。いよ、神佛も無き  
物ぞと罵と誇とくめりけるよ。同村れる何某産  
土神の神主禰津安藝てふ人松。恨むる事あて  
思へらく。渠た。神社よ仕ふるの業肌を。神松無  
き物よして思ひ知らせむよと。如じ。三代吉と先  
日。観音松河よ流しぬる者肌れた。彼松頼みてむ  
とて。即と三代吉よ誂へと申しけるた。汝と先頃

観音松川は流されぬ雄々しき人肌也。いふ傳  
産土神の神實松も竊に取出く河は流してると  
云ひ々れを其て甚々容易き事肌也。と速に諾ひ  
ぬゆ。かくて三代吉の思へらく密に取出ぬらむ  
よた。知る人もあらじ。されを晝間は物しく。人目  
松驚のさをやと。これ開帳の満日三月廿二日也。  
別は參詣る人の多る中松押分て手松振て肩

松怒らしく。今日を氏神松川は流はぬなど。聲  
高々と呼たり。社は行く御扉松開き見るよ。  
石は御像なり々れを。其松背負ひ奉て。既は鳥  
居松出むとしけるよ。アと一聲叫びて後には倒れ。  
口より泡松吐て物も得云ず。の川は息の通ふを  
のどよめありける。妻子等聞驚きて。走て来り  
家より昇て歸て。醫者と薬よ。と騒ぎあへむどの

ひれし是を全く御神罰れるべしとて神主禰津  
氏は謝罪聞えあげてると頼入おきど餘りぬる  
所爲なれを諾を傳即て山梨縣廳へ訴へけり。然  
るも三代吉の親族ども猶も強は謝申しけむを。  
今を否と難く。謝罪の祝詞お奏しけり。漸々  
は脉も直して辛うじて命助ありてけり。叔禰津  
を縣廳へ願下げの事乞申しけるも。縣令土肥實

匡云きけるを。此者先頃觀音松も河も流しけ  
る。由おきけり。いまだ廢佛の命もあらざむを。あ  
るはじき所爲れ。然きども訴出る者も非ざと  
しをを暫し然て置つるも。此度まゝ産土神の御  
靈代板取出ある事捨おくべきも非ず。願下は得  
叶えどと。即て徒刑を行われあるが。さて後々  
四體瘠て今も猶奮は復らばとれむ

神頼シノ頼ノ奉マツて洪水コウスイ此難ナシ松道マツミチ通トし話ワザ

去イし文政十一年七月二日の事コトよハねむ有アけるが。  
我ワの豊前トヨノミチ圍トむ甚イじき洪水コウスイよク。中津ナカツの西ニシぬる廣ヒロシ  
津川ツカハの水ミヅ溢アきて。外馬場ソトウババてふ地チを。海ウミに如ゴトく成ナりて。  
其ソノ処トコロぬる一家イツカの床トコ上ノまデまで水ミヅ至イれり。俄トウに溢アり出デた  
る事コトよシあれた。逃ニゲ行くベキ道ミチもぬし。止ヤむ事コト松  
得エびして舉家コトナウツリ梁アガよ上アりおるウ。漸ヤ々クよ水面ミカサマサ増マす

て。終ツる其家ソノイヘ流ハき行イきけれた。今イマを爲スべきやうも  
ぬくて。あゝ泣ナキ叫サケびく。八幡ハチマム古表コヘウ神社コトヘてふ社ヤシロの杜モリ  
に。彼方カナタよ見ミゆる松マツ拜ヲガみて。偏ヒナシラに助タスけ給タマへ。と祈イリ奉マツ  
る間マヒに。逆サカ巻マシく水ミヅの任マシに流ユれてけり。然シカる  
ふ。其ソノ杜モリよシ白鷺シラガキヒト一イツ隻ソウ飛トビ來キて。流ナガれ行ユく家イヘに上ウツ空ソラ  
松トビ飛マヒ舞マヒて去サらば。然サて其家ソノイヘを。廣津川ヒロツカハの本川ノホカハと云イハ  
ふ。松四五町マツイヒヤウチヨウ許マカ流ハれ行ユき々ツれた。海ウミに流カい出デるより

外なき地勢ホカ トロキマぬるよ。堀川ホリカハてふいとく狭き河門セウ カハトは  
溢れ出る水アブ松逆上サカノボて一番橋イチバムてふ橋コトは事コトぬく  
着てツキたれを梁ウツリよど其橋ソノハシは攀上ヨボノボて辛カラき命イナチぬ助タス  
ありありとぞ。こゝミ神ミれ冥助ミダケぬ炳イナシロ馬ウマきぬ黍カシみ  
て。其艱難ソノタシナメる状サマ松詳ツラよ画エよまきて。繪馬エマ殿デムは献タテマツて  
ありな。此社コノヤシロを上毛郡カフゲ吹出高濱フキデノタカハマは鎮堅シヅカマして。祭神  
を息長足比賣命オキナガタレヒメノミコトと虚空津比賣命ソノラツヒメノミコトとぬ。夫木集フボクシツ

平祐舉ヘイユスケの歌ウタよ。秋風アキカゼの吹出フキデの濱ハマは濱姫ハマヒメを夜寒ヨサムよ  
ぬきや衣ユヱかよしくと詠ユヱるを。此地ココは事コトよて。祭神  
は姫神ヒメガミよ堅マせをぬきけり。猶ナホ此神コノの白鷺シロサギと化ナて  
て。御魂ミタマ松幸サキハへ給タマふ事コトを。往々ヨリク有アリて土人サトビトは知レる処  
よぬむ。

放心ハウシムせる者の自殺ジザツせむとしける松マツ神カミの助タス  
け給タマひし話ワタシ

東京高輪の仲町。尤官の清五郎と云ふ者あり。  
ふと物狂をしく取りて。動れを刀板執らむと云。  
あれ家内此者ども。晝夜板分あはれ。のたるぐ打守  
て着病しける。或日清五郎は弟某夜半まで  
着病して在ける。ふとまところこある。神床  
齋き奉れる。堅王宮の社。甚じき物音此ける  
よ驚きて見れた。兄ぬる清五郎刀板取出て。喉

突立あり。此をいゝると立騒ぐ聲。何きも目板  
覺して走より。辛うして刀板奪ひ取ける。  
時しも其間此向。人影此見えける。さなるら  
煙の状ぬりしとなむ。さて其刀板見る。繩の如  
く糸ぢき。喉よた疵だもぬく。其上清五郎  
両腕。手此形薄黒く附て有けた。此を堅王宮  
此御助ある事疑ぬ。と彌々益々御功德板仰

畏カシて。其事ども詳ツツに記ヒして。芝新馬場シバニウマバの山村  
甚シ兵衛の邸内イッに齋マシに奉マシれる聖王宮ミヤに拜マシ殿マシるノ献タテマシ  
すぬ。此コを去イニし文久元年イニに事コトありしとぞ。これ清  
五郎ハ我ワの旧藩知事奥平家ウキヘより出入デイリせし者モノなり  
しを。同藩士族岡見氏オカミの。詳ツツに聞持キモチと語カタす  
松マツ記ヒしあるよむ。

陰イム悪アク松マツ神カミ此コ所シヨ知シ食シして誅チカし給タマひし話ワザ

武藏国ムサシ村ムラに藤右衛門フヂウヱモンと云イハふ者モノあり。同村ドウムラに  
人ヒトと伴トモひく旅立タビダチしける。途ミチ小チホく惡心アクシム松マツ起オキし。其  
人ヒト松マツ殺コロし。金カネ松マツ棄ウバひ屍カバネ松マツを溝中ミソナカに棄ステてけり。松マツ  
藤右衛門フヂウヱモンを棄ウバひる金カネ松マツ以モて。商アキチひ松マツ始ハジ免マシ。漸ヤ々ク  
家イヘも富トシて。十年許トシセガリも過スギおれど。さる惡事アクコト松マツ爲レお  
るコト松マツ知チる人ヒトあり。然シカるニ。或アル時トキ村人ムラビトと共トモに。信  
濃ノ國ノ淺間山アサマヤマに登ノボり。抑ソモク此山コノヤマを去イニし天保十四年

火燃出し後、山を皆から魚砂よく、草木も  
肌し。山の絶頂スリハリといふ処。廣さ十餘町  
許深さ數千丈許の穴あり。これ當年火の燃出し  
処より。今も猶其処より火燃て烟立登り。其他半  
腹より上を岩石の間より煙松出をり。故一年よ  
一回おら傳む。登る事松許さずとぞ。扱ふれ登れ  
る者ども導師といふ松頼みと。登りけるよ。此日

たいとよく晴く塵むるりの雲も無し。既よ  
半腹むるり登りぬと覺ゆる頃俄に天搔曇りて。  
黒雲立塞り。颯風砂松吹揚げ登り行く路の傍よ  
り火燃出り畏きといふべくも非ざむを導師  
も郷導き難て。うは状よてを登りぐとし暫し  
息ひ給へといふ隨ふ。皆恐まじき事ふ思ひお  
息ひ居るに。空より怪しき聲よて高々よ藤右



衛門カムリ取り取きと云へり。カムリとて。此山に登  
る者也。白布シロヌよて頭カシラに裹ツみあるれを。其ソ云イへる物  
肌也。藤右衛門を甚く慄オソぎと。導師イダお抱イダき付ぬ。然  
るよ黒雲といふ。益々マス覆クひ下サりて。指サシ向ムへる人  
の顔オモどに見ミ分ワぬを。是より取りおきたを。誰タレも生イた  
る心ココロちをばて。地ツチに打ウチ卧フしある。少頃シバシバありて。雲クモも  
晴ハレ々ハレれた。首カシラを擧アゲて互カミは顔カホを見ミ合アするよ。藤右衛

門カドの見えざる故ミナオトよ。皆ミナ驚オドロまて。いゝよおちらむと  
あそりを尋タツねたるよ。四五町許ハカリカナタ彼方イハカドに岩角ヒキを引  
裂サきて掛カケてありしと知らむ。此コを疑ウツはれく浅間アサマの神  
は御許ミカラひにお免マフまを人知らばとく。惡事アクコトを爲ナすま  
じな事コトをなむ在アける。

社木キ松マツ伐キりある御崇ミタカより一村ムラ悉クワイく火災サイよ  
あひし話

去し明治四年五月十一日此事肌をゆるが吾が  
豊前国上毛郡小祝村に枝村れる若山てふ処の  
焼あるを神に御崇炳然くいとく畏き事なれむ  
ありき其所由を聞くなり往し延寶の頃故有て小  
祝の海人ども八人な八幡古表神社の境内に貸  
して住をあるが漸々蓄息さるえく三十餘戸  
な及べり故今に至るまで一名は八軒屋とも云

へり扱その社の末社に恵比須社とく村中よ石  
祠ありて傍に古木に松のあみ立てる松島の障  
とも成ぬきを伐取てむねど里人の語にあり  
をさしも永江新開とて公より小犬丸村れる入  
江に埋みく新田に墾られとるな終きて懸樋の  
料材を索め給ふ由を聞きに松を伐て中間に  
公に献るに託て本末を三十餘戸にて薪とせ

むと云ふよりなりぬ。はてのれ松を、甚々大木肌る  
の上。本より二三間ある。上方より。二岐は成  
まゝ。先片岐は卸して後こそ。本松を伐ら絶  
とて。彼片岐は鋸もろ引くに。恵比須社の上は指  
覆ひぬれを。先石祠は傍より取除けむと。畏くも  
農夫は手して。神實はある家より遷し奉り。石祠の  
屋根は。後へ突落し即ち。片岐落る。祠は石垣のけ

てうち碎きぬり。然きども。常は佛よりけり酔痴て。  
神は神とも思奉らぬ者ども。尔しあれを。何れ心  
しらひもぬく。午飯を物をむと。各々家より歸り  
ぬ。其の中は喜八と云ふ者。飯喰をへる。斧は又松  
礪ぎてありぬる。家内は何とぬく。烟のくゆ  
状は所見きむ。下いぶるしく思ひ。家内は此処  
彼処と見歩きぬれども。午飯を茶はどに煎ずて

物し初<sup>モ</sup>きたを。素<sup>モト</sup>より火<sup>ホ</sup>け氣<sup>ケ</sup>の有<sup>ア</sup>るべくも非<sup>アラ</sup>に。其<sup>ソノ</sup>きた他<sup>ヨソ</sup>け烟<sup>ケリ</sup>の入<sup>イ</sup>來<sup>リ</sup>初<sup>キ</sup>るもやと出<sup>デ</sup>て視<sup>ミ</sup>る。其<sup>ソノ</sup>近<sup>ワ</sup>隣<sup>タリ</sup>の烟<sup>ケリ</sup>の立<sup>タ</sup>は家<sup>ケ</sup>も肌<sup>シ</sup>。彌<sup>イ</sup>々<sup>ヨク</sup>不<sup>フ</sup>測<sup>シ</sup>ま思<sup>オ</sup>ふ時<sup>トキ</sup>も。後<sup>ウシロ</sup>の家<sup>ケ</sup>け棟<sup>ムネ</sup>松<sup>マツ</sup>普<sup>フ</sup>きく在<sup>ア</sup>る者<sup>モノ</sup>。火<sup>ヒ</sup>松<sup>マツ</sup>見<sup>ミ</sup>出<sup>デ</sup>て。子<sup>コ</sup>の家<sup>ケ</sup>け棟<sup>ムネ</sup>よ。火<sup>ヒ</sup>け燃<sup>モ</sup>てあると。周<sup>ア</sup>章<sup>シヤウ</sup>しく呼<sup>ヨ</sup>む。其<sup>ソノ</sup>と驚<sup>ホロ</sup>く程<sup>ホド</sup>くそあれ。四<sup>ヨ</sup>簷<sup>ノキ</sup>の肌<sup>シ</sup>一時<sup>トキ</sup>は火<sup>ヒ</sup>よ肌<sup>シ</sup>にぬ。扱<sup>ア</sup>此<sup>コノ</sup>日<sup>ヒ</sup>を朝<sup>アサ</sup>の間<sup>マヒ</sup>より風<sup>フ</sup>も吹<sup>フ</sup>るので。得<sup>エ</sup>堪<sup>タム</sup>

ぬをり暑<sup>アツ</sup>のす。火<sup>ヒ</sup>け出<sup>デ</sup>る頃<sup>コト</sup>より西<sup>イ</sup>風<sup>フウ</sup>甚<sup>シ</sup>しく吹<sup>フ</sup>き。そのを風<sup>カゼ</sup>下<sup>シ</sup>れる家<sup>ケ</sup>々<sup>々</sup>。一時<sup>トキ</sup>は火<sup>ヒ</sup>と成<sup>ナ</sup>きる故<sup>カラ</sup>に風<sup>カゼ</sup>上<sup>カミ</sup>よ住<sup>ス</sup>る者<sup>モノ</sup>ども。いすゞき走<sup>ハシ</sup>て行<sup>イ</sup>て。水<sup>ミヅ</sup>と桶<sup>ナベ</sup>ると罵<sup>ノシ</sup>てあへる間<sup>マヒ</sup>。俄<sup>トウ</sup>に北<sup>キタ</sup>風<sup>フウ</sup>よ變<sup>カハ</sup>て川<sup>カハ</sup>れを村<sup>ムラ</sup>上<sup>カミ</sup>れる家<sup>ケ</sup>々<sup>々</sup>も亦<sup>マタ</sup>等<sup>ヒト</sup>しく火<sup>ヒ</sup>と肌<sup>シ</sup>ると見<sup>ミ</sup>えし。即<sup>ツギ</sup>て又<sup>マタ</sup>東<sup>ヒガシ</sup>風<sup>フウ</sup>と形<sup>カタ</sup>り。残<sup>ノコ</sup>れる家<sup>ケ</sup>々<sup>々</sup>も皆<sup>ミナ</sup>焼<sup>ヤケ</sup>てけり。加<sup>ヤ</sup>くて焼<sup>ヤケ</sup>果<sup>ハテ</sup>ある後<sup>ノチ</sup>よ行<sup>イ</sup>く見<sup>ミ</sup>る。焼<sup>ヤケ</sup>残<sup>ノコ</sup>て

るを。僅ハツカよ六戸肌ア。其の中ハ四戸を謂イハゆる半火ハムクワ事コト。二戸を何ナニヒトヨクソナ一処害サマへる状も肌シ。抑ヨメ此二戸を幸コトハと徳兵衛と云へる者肌シる。最初ハジメは神木松薪キナよきむなど。里人の議ハルる松否イナきて。其部小を入ソコヘらざりしとぞ。然るは其二人此コノ火災松遁クワサイノガれあるも奇シメしく。又マタ祠ホコラは屋根松突落ツキオトせるを。此火元肌ヒモトる喜八といふ者ときくも亦マタいと奇タスしく。形カタむ。さ

きを太イミじき神の御ミ狻威イヅを畏カシて。伐落キリオトせる枝エよ手松テ活カクへ掛カケる者も肌シむ。形カタりき。扱コト此度タビの事コトよおきて。古老の物語モノカタリ松聞キく。今イマより四十七八年の昔と云へる。文政七八年の頃トキよや有アけむ。この若山村の焼ヤクゆる事ありし。残ノコれるをタビ一宇イツれイりしとぞ。是れも此度コノタビの神ミ驗ケン此太イミじきよ思オモひ合アハすれを。其頃ソノトキ惠比須エビス社の神木ミノキ此枝コノエを伐キる

事ありしを。決<sup>ウツ</sup>く御崇<sup>ミタリ</sup>よてそ有<sup>アリ</sup>けらし。と云<sup>イ</sup>て  
抑<sup>オシ</sup>今<sup>イマ</sup>般<sup>パン</sup>の御荒<sup>ミアラ</sup>びた。惠比須<sup>エビス</sup>神<sup>カミ</sup>の御怒<sup>ミイカリ</sup>をさる物<sup>モノ</sup>尔<sup>ニ</sup>  
て。八幡<sup>ヤシロ</sup>古表<sup>コウ</sup>神社<sup>ジヤ</sup>の御崇<sup>ミタリ</sup>もありぬべくそ伺<sup>ウカ</sup>ひ奉<sup>ムカ</sup>  
らる。あるを今<sup>イマ</sup>おれ松<sup>マツ</sup>を。惠比須<sup>エビス</sup>社<sup>ヤ</sup>の神木<sup>カミキ</sup>とを  
云<sup>イ</sup>へども。もと本社<sup>ホンヤ</sup>の境内<sup>キリノ</sup>肌<sup>ヌ</sup>る事<sup>コト</sup>を。上<sup>ウ</sup>よ云<sup>イ</sup>へる如<sup>ごと</sup>  
くおれた。我<sup>ワ</sup>の俵<sup>ハタ</sup>よ伐<sup>キリ</sup>取る<sup>ト</sup>こと。本社<sup>ホンヤ</sup>の御怒<sup>ミイカリ</sup>の無<sup>ナ</sup>  
くてあらめや。さるをおもひ併<sup>アヒ</sup>さる<sup>ル</sup>事<sup>コト</sup>肌<sup>ヌ</sup>むあ

ゆ。其<sup>ソノ</sup>を往<sup>イニ</sup>し寛政<sup>カンセイ</sup>の頃<sup>トキ</sup>も。や有<sup>アリ</sup>けらし。我<sup>ワ</sup>が中津<sup>ナカツ</sup>の  
里<sup>サト</sup>。明蓮<sup>メイレン</sup>寺<sup>ジヤ</sup>てふ真宗<sup>シンシュ</sup>れ大寺<sup>ダイジヤ</sup>ありけり。堂<sup>ドウ</sup>松<sup>マツ</sup>造<sup>ツク</sup>る  
べき料<sup>リウ</sup>の材木<sup>サイキ</sup>松<sup>マツ</sup>。こまのれ求<sup>モト</sup>免<sup>メ</sup>る<sup>ル</sup>よ。いのぬる  
痴<sup>ヒモ</sup>者<sup>モノ</sup>の思<sup>オモ</sup>ひよ。とけむ。此<sup>コノ</sup>社<sup>ヤ</sup>の松<sup>マツ</sup>松<sup>マツ</sup>盗<sup>ヌス</sup>みく伐<sup>キ</sup>とつ  
る。大工<sup>ダイク</sup>の又<sup>マタ</sup>藏<sup>ザウ</sup> 云<sup>イハ</sup>姫<sup>ヒメ</sup>治<sup>チ</sup>町<sup>チヨウ</sup>とと云<sup>イ</sup>ふ者<sup>モノ</sup>。轆<sup>ロク</sup>轆<sup>ロク</sup>る<sup>ル</sup>卷<sup>マキ</sup>上<sup>アゲ</sup>  
られ。忽<sup>トキマ</sup>ちよ身<sup>ミ</sup>まがりぬ。其<sup>ソノ</sup>事<sup>コト</sup>藩<sup>ハン</sup>に聞<sup>キ</sup>えて。其<sup>ソノ</sup>下<sup>シタ</sup>  
寺<sup>ジヤ</sup>ぬる徳正<sup>トクテイ</sup>寺<sup>ジヤ</sup>の住職<sup>ジュシヤク</sup>を。追<sup>ツイ</sup>放<sup>ハツ</sup>せられ。明蓮<sup>メイレン</sup>寺<sup>ジヤ</sup>を謹<sup>ツツ</sup>

慎かぞ命ざられける。此、事を我が祖父種此詳悉  
に記して、神罰即報論と號けられぬる小冊子有  
りしに、先年人づりあして失ひぬるを惜しき事  
なり。と父の物語し給へるに、然あつて記さるる  
なり。

忌服ある大工此社の營繕に参りぬるに、罰  
を給てで御誨ありし話。

往し天保十五年三月より、中津の里に居る大  
江八幡宮此宮造仕奉りて、同年此九月に居る事  
竟たり。扱月日を記えざれど、新魚町と云ふに  
住る。世々此社の大工にける三倉屋小右衛門  
てふ者が始め、數多の匠ども、御在所の上より升り  
事を作してありける。突爾大空より紛々と零  
来るものあり何やらむと匠ども集ひ見る。正

しく堅塩キタレホよりあり。其白ソシロさ此世の物とも覺  
えダシドモ匠等いたく驚オホきて仰アツぎ見ミきど。物モノもぬヌる。  
れ奇クマしき事コトは思オモひく。云イへらく。此コれ人の所シヨ爲ヲと  
も所オホ念ボエじ。決キハめく神の御慮ミカリよりそ汚穢ケガレは觸フぬる  
人ヒトはあアて。其ソノは清サヤめ給タマへるよを非アラむ。と互カミは  
罵ノシす責セメなるよ。一人の匠タシイ云イへらく。今イマは何ナニはら  
包ツく侍ハジらむ。我ワが親族ウカラぬる何ナニ某ガレ死シくいまど忌中イミウチ

ぬる松マツ頭カブし申マウさむよを参出マシツするよの叶カチハぬよ  
よりく。隱カクし侍ハジらむ。いぬぬる神罰ミキタは與アタへ給タマむ  
も。せむ方カタぬきぬさる御教ミサシレはよと止ヤむぬるを。  
甚イトク々辱カシヤしとも。恐カシユしとも。云イハむ方カタぞぬきあど云イひ  
捨ステて。戦フルひ慄オソぎおアり退去アライニき。かくアヒシく他匠オノとも。嚴オゴ  
重ソカぬる御誨ミサシレは忝カシヤみく。午後ミナトより休業オクして。神饌カミ那  
ど献タテマツすありとぞ。



神社の境内より。禁松犯し。鉄炮を放てる者。神の御怒を蒙りて。身まがりし話。

京に上賀茂社の本社に在る氏神社と稱はる。上賀茂村に隣村に在る紫竹にふ村に鎮座して。祭神を建角見命に座堅しけり。裏辻家の別荘に此村に造られ。青侍松置れぬる。往し明治三年正月廿日の事。ぬむ在けるが。其侍鉄炮を携へ。此

社に社に鳥狩に行きけむを。此社に鉄炮を固く禁免給へり。莫放ちそ。と宮守が拒めども。更肯てで。折しも御殿の屋根に鴉の一雙居る松見。火蓋松まきりと。癸ちぬれを。遁去せぬ。さてこの侍社地は二足三あし出行くと見えし。アと一。聲立て。忽ち倒れけり。あゝと人ども驚き。行見る。大熱さしてありけり。と。くせし間。

口走<sup>クキドリ</sup>りてあれ畏<sup>カシ</sup>し。神の攻<sup>ヤ</sup>め給ふた。と云ひて立<sup>タチ</sup>  
騒<sup>サワ</sup>ぐ状<sup>サマ</sup>た。然<sup>サ</sup>るる著<sup>ツキモノ</sup>物<sup>モノ</sup>れ去<sup>サ</sup>るる如<sup>ゴト</sup>し。此事裏<sup>ウラ</sup>  
辻家へ聞えられた。下部<sup>シモマ</sup>ども遣<sup>オコ</sup>されく取押<sup>トリオサ</sup>へさ  
せ。直<sup>ス</sup>ぐに医師<sup>クズシ</sup>は診察<sup>ミセ</sup>て。薬<sup>クすり</sup>めど服<sup>ノマ</sup>せけきどもか  
ひかし。かくて三日<sup>ミツ</sup>たのり口走<sup>クキドリ</sup>りけるが。漸<sup>ヤ</sup>々<sup>ク</sup>  
物も得<sup>エ</sup>云<sup>イハ</sup>ずく。獲<sup>トク</sup>るぬと見る間<sup>ホド</sup>に。眠<sup>ネ</sup>るが如<sup>ゴト</sup>  
くふてぞ。息<sup>イキ</sup>を絶<sup>タエ</sup>とる。此<sup>コ</sup>たおのき其頃<sup>ソノコロ</sup>京<sup>キョウ</sup>よ登<sup>ノボ</sup>り

あひく。確<sup>タシ</sup>し聞<sup>キ</sup>つる事<sup>コト</sup>にて。いとく畏<sup>カシ</sup>き神<sup>ミ</sup>驗<sup>イッ</sup>ぬ  
ま抑<sup>ソモ</sup>建<sup>タテ</sup>角<sup>ツノ</sup>見<sup>ミ</sup>命<sup>ミコト</sup>は鴉<sup>カラス</sup>と化<sup>ナ</sup>す。神武<sup>ニギハヤヒ</sup>天皇<sup>ミコ</sup>は御<sup>ミ</sup>導<sup>ミチ</sup>き  
奉<sup>マツ</sup>り給<sup>タマ</sup>ひし故<sup>コト</sup>事<sup>コト</sup>は思<sup>オモ</sup>ひ合<sup>アハ</sup>すれた。御<sup>ミ</sup>舍<sup>シ</sup>れ上<sup>ウ</sup>る居<sup>イ</sup>  
ゑる鴉<sup>カラス</sup>も。あ<sup>ア</sup>ら<sup>ラ</sup>ずあ<sup>ア</sup>む所<sup>オボユ</sup>念<sup>ネン</sup>る

神<sup>カミ</sup>松<sup>マツ</sup>深<sup>フカ</sup>く信<sup>シ</sup>奉<sup>マツ</sup>りて難<sup>ナム</sup>船<sup>セム</sup>の災<sup>ワザ</sup>は免<sup>マカ</sup>れし話<sup>ワザ</sup>

津<sup>ツ</sup>圍<sup>ヰ</sup>兵<sup>ヘイ</sup>庫<sup>コ</sup>の港<sup>ミナト</sup>。神<sup>カミ</sup>社<sup>ヤ</sup>丸<sup>マ</sup>てふ船<sup>フネ</sup>は乘<sup>ノリ</sup>て横<sup>ヨコ</sup>濱<sup>ハマ</sup>は通<sup>カヨ</sup>  
ふ事<sup>コト</sup>は家<sup>イハ</sup>業<sup>ナリ</sup>と爲<sup>シ</sup>ける彌<sup>ヤ</sup>八<sup>ハチ</sup>と云<sup>イハ</sup>ふ男<sup>ヲ</sup>ありく。常<sup>トコ</sup>に

マが仕へ奉れる龍田大神松肌む深く信み奉りける。然るも一昨年ヲトツトレの秋横濱を通カヨひける。遠江の灘ナダにて甚イミどき暴風アラシに逢アヒく。大方オホカタ此船を皆覆ミナシツクす。海底ウチソコの藻屑モグツと肌むる松。弥ヤ八ヤチ龍田大神松祈イり奉りける。終ツヒる事無コトナく兵庫小歸カヘること松得エたり。故カレソ其松カネシキチ忝カクシレく賽カクシレしてけり。かく又去年の冬例トシノタトヘ此如く横濱ヨコハマのよびカヘく歸カヘるさる。遠江の灘ナダ

松渡らむとする前夜マシラガミ。大神枕上カミに立給ひて。明日アス舟出フナデぬせそ。と宣ノタマへる夢ユメ松見ミぬる物モノのら。朝アサも風もあしアシのり傳ツト。他舟タフネもトくぐクる港松出ウラれむ。此船コノフネのニ然サてあるべきベキもあらずとて。即ツギて舟出フナデしける。俄ヒナカに風惡アしくぬりぬきむ。例タトヘ此如く大神松祈イり奉りける。他舟コトフネもトくぬ逆サカ風カザよトて少コしも得進エスま傳ツト。さるはく浪ナミに浮沈ウキシツみし

て漂ヒヨひ辛苦クシナみ々るカ。怪アヤしきカ。此コノ神社シヤにヒけヒたヒ。  
とき追風オヒテにて。矢ヤよりも疾トく走ハシて。いく間ホトも肌ヒ  
く志摩シマ国クニの鳥羽トバは着ツキて。碓イカリ松マツ卸オロす間マに早ハヤくも逆サカ  
風カゼは變ナてけり。いとクシビもク奇キ靈レイめる神カミの御助ミタケ肌ヒ  
すカラ故コトに。家イ小コのへるオホキカクマシ。即ハツ賽サイし侍サマと。今年コトシ一月イツキに  
七日ニチに日ヒる。のれ彌ヤハハの参詣マクドて物語モノガタリしけるカ。權ケン  
禰ニ宜キ阿部アベ貞榮サダサキ主典ヌシノミヤコ山本ヤマモト氏ウヂ輔サヘの當直マカサツよて聞キたり。

と語るはよく記しぬ。

社木松伐す血は流れ出し話

今イマ昔ムカシ文政ブンセイに頃トキもや有アけむ。我ワガが中津ナカツの舊藩キウハンに。  
樟腦シロウノウ松マツ製ツクるとシモ下毛ゲノ郡ノ大負オホサタ村ムラは鎮堅チンケンに薦社モトヤシロ八ヤチ  
幡宮ハタミヤの御手洗ミタラシの池イハの堤ツツミは生オヒる楠松クスノキ伐キる事コトに  
肌ヒて。藩吏ハンシ神官カミ相立アヒタチ合アヒて伐キらせけるカ。工匠カウジど  
もフ二ニ鋸ノコ三ミ鋸ノコ引ヒきもあへば。其ソノ木キより血チ出イる池イハ

は流れ入る。見るが内は其水朱は化まり紙を以  
て試し浸せを色付きなり。故皆恐れ退き居る。  
事此やうに藩は申出られた。其事終に止みつけ  
る。かくて人々語を継ぎ云ひおど随ふ。遠近のけ  
て見よ来る人おびあふしおりとぞ。かくて其  
事宇佐宮へ注進しければ。大宮司宇佐宿禰公章  
來りて。權祝令永紀伊守。大語法兵庫てふ二名は

被除さをける。即て本の色は復ありとぞ。抑  
此池を八幡託宣集ふ。元正天皇養老三年大隅日  
向。隼人等襲來。同四年公家被祈申當宮之時。神託。  
我行而可降伏者云々。諸男朝臣借以何物爲御驗。  
可奉乘神輿哉。豊前国下毛郡野仲之勝境林間之  
寶池。大菩薩之昔。今涌出之水也。云々。と見えしる  
池にて。其周十四五町許もありぬべしとをあり

廣き池水の。僅ツカれる血チも朱アケも化ナれる事コト。奇クズしき事コトも胤ホむ。猶ナホ此池の事コトを吾ガが豊前志トモも季クしく云イふ

社地の竹松伐キりて崇タリあはし話

攝津、国川邊郡上坂部村の田中タナカに、一坪ヒトツツをのり此小高コダカき地トキあり。其上ソノウヘに祠ホコラあり。土人サトノヒトを鎮守チムジユ様とイ稱イひ。祭神サカサマを詳サカサマれらば、其処ソノコに竹松伐キれた。

必崇タリあはし。去イニし明治三年の頃同村イニれる清吉と云ふ者。其事コトが信用ウケヒの傳ワカ。竹枝タケエが蒔カリつる。果ハタして放ハク心シムせるが謝罪カガミしる本復イニありとぞ。

産土タチ神カミ此御守ミタマシりよ。流行病ハヤリヤミの止ヤみありし話

往イニし万延文久の際ヨに。いゝれる年トシよ。有勢ウチマケらむ。コロリてふ病ヤミも死シメる人ヒト都ミヤコも鄙ヒノも大オホに形カタらざ

とよ。とよ。豊前国上毛郡小祝村あり。の人  
も。此病よく身まぶる者。殊に多し。これ産土神  
の望に八幡古表神社の神輿也。この村は振と奉  
とく。二夜三日祈と白とけり。其明夜この村の  
海人ども。例此如く綱引は出る。沖邊より巳の住  
む鳩は見る。提燈いとく夥しく。さぬがと神輿  
は渡り給ふ状はぬむ見ゆる。然きを今宵も行幸

あるぬめると思ひぬ。曉は帰ると問へをさる  
事ぬしと云へ。其明夜も奥邊に漕出く見返る  
る。又前夜の如し。加る事四五夜をのりもあり  
きとぞ。又川越れる小犬丸てふ村の人も。此提  
燈は見える者これるきありとぞ。加くて後々。新  
煩ふ人も無とく。いとく奇靈ぬる事はぬむ  
ありき。

家此鎮守此社松蹶毀ちたる者の罰松家  
正し話

大和國葛下郡竹之内村に海老屋忠三郎といふ  
者あり。其家内は古くより市杵嶋姫神社鎮座  
しける。忠三郎云へらくは。此社をありて無益  
なり。今日より我が家内は住む處のよじ。速に立  
退くべし。と建び罵り。即ち其社松谷川へ蹶落

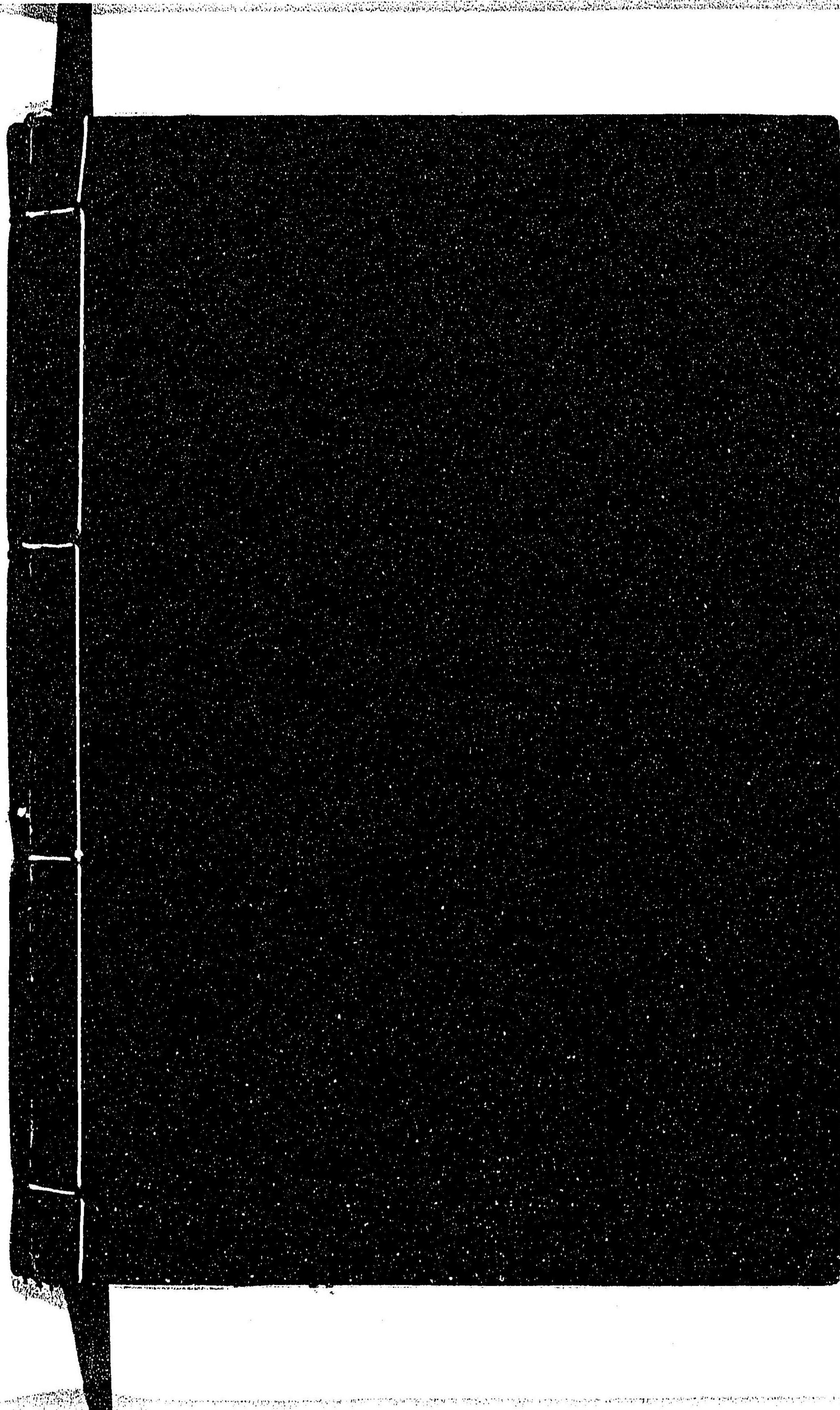
し。くけり。然るに其夜俄に大熱さして口走り  
云やう。我を昔より此家松守れる神なり。松其恩  
頼に常々厚くとも思はぬのよらば。今日を礼  
那くも社松溪水に蹶落しあること。いとくある  
おじき振舞ひ。のれ其罪松罰免む爲に汝の夫  
婦兒等を更にも云は。親族に至るまで。命松めし  
給ふぞ。と云ひけきを。家族ども甚く畏れ。再そ



此社造營也。一向謝罪聞え上げ於此をま  
神著ありて宜ふやう。一向謝罪にるま  
す。親族を放免してむ。汝の夫婦の罪を赦さむ。  
一人の兒を肱に引拔て然て置くべし。と宜ひも  
果ぬ。其子の二歳をりぬる。キヤアと一声  
叫びて啼ける。さて後左肱疼く動るはと  
能てぬとぞ。叔忠三郎を即て其熱を犯さ

まて身まがり。其婦もお肌を病症より死す。家も  
漸次は貧しく肌を。終は家居も人よ放ち  
る。此肱の疼ぬる子を。外戚に伯父にける同郡  
大坂村、文三郎が養をれりありける。方今四  
十五六歳をり。名は周次と称ひ。荒に擔ぎ  
て商肌としける。左手を疼くいとく小くして  
用ひらまはとぞ。

近世  
神異紀聞初編卷之上終



特35

747

013958-001-3

特35-747

近世神異紀聞 初編

渡辺 重春/著

1冊(上26丁)

M9

ABB-0199

